

香川県伊吹島方言の アクセント体系を考える

佐藤 栄 作

要 旨

2拍名詞五つの類を五つに言い分けることから“第一次アクセント”であるとされる香川県伊吹島アクセントについて調査した結果、まず2拍3類は“高く始まりやや下降する音調”であり、高く始まり下降しない1類と対立していることが確認できた。3拍以上でも、低拍の高さまで下がることのないただらとした下降を有する音調型が存在し、2拍3類と同系列と考えられる。4拍以上では、ゆるやかな下降の後、滝が表われる型も認められる。この系列は、従来の段階観、調素観では表しえないものであり、高を保つ高起式 H に対して H' 系列と解釈した。すなわち伊吹島方言のアクセント体系は、H, H', L (低起式) の3系列からなる。

はじめに

香川県の西端、^{カンノンジ}観音寺市沖の^{ヒウチナダ}燧灘に浮かぶ^{イブキ}伊吹島のアクセントは、母音の広狭などの音韻的条件によらず、2拍名詞のいわゆる五つの類を五つに言い分ける唯一のものであり、日本諸方言アクセントの系譜上、その原初的形態—“第一次アクセント”であると認められている。しかも、類聚名義抄などから導かれる平安後期の京都アクセントの五つの類と、所属語彙において高い一致率を示すばかりでなく、それぞれの音調も類似していると認められ、まさに古代アクセントを今に伝える貴重なアクセントであると考えられているといっても過言ではない。

本論文では、このような伊吹島方言のアクセントについて、これまで必ずしも詳しく報告されたとは言い難い3拍以上の体言を中心に、一部用言も加え、その具体的音調を示し、そこから導かれるアクセント体系とその解釈の過程から生じる問題点を考える。

1. インフォーマント、調査期間、調査方法

伊吹島は面積約 1 km²、人口およそ 1,700 人。集落は密集し、島内に方言差はない。調査に協力していただいた方々の氏名、性別、生年、略歴を挙げる。インフォーマント^{注1} 諸氏はいずれも現在島内に居住し、両親ともに伊吹島生まれである。

合田ソデ 女 明34 16才から5年間、岡山県玉島の紡績所に勤務。

伊瀬ミツ 女 明40 14才から9年間、岡山県玉島の紡績所に勤務。

久保ユキ 女 明36 60代になって大阪の娘の所で何度か暮らす。

伊瀬善太郎 男 大8 21歳から5年間旧海軍。

伊瀬聰子 女 大10 島外で暮らした経験なし。

久保かず子 女 昭5 3歳から11歳まで旧台湾で過ごす。

伊瀬ミツミ 女 昭6 島外で暮らした経験なし。

久保儂次郎 男 大4 香川師範を卒業後、小豆島などでも教鞭をとった。現伊吹公民館長。

他に、小学生1名、20代の男女1名ずつを調査したが、若年層については改めて報告し、今回伊吹島アクセントといった場合、特にことわらない限り、中老年層のそれを指す。

調査期間は、1981年8月、1983年8月、1984年3月、5月、8月。各2～4日間である。

調査方法は、まず調査表(1～3拍名詞とそれに助詞などを付けたもの、いくつかの動詞、形容詞の各活用形が含まれる文節)を読んでいただき、部分的には繰り返し尋ねた。主として、合田ソデ、伊瀬ミツの両氏には、語数を増やし4拍以上の名詞の調査にも協力していただいた。その際には、単語、文節、文単位でこちらで用意したものを、自然な会話調で読んでいただいたり、質問形式で聞き出ししたりした。調査語彙は、金田一春彦氏の類別語彙表^{注2}を基とし、上野善道(1976)などを参考にして、和語を中心に私が選んだものを用いた。また調査中の談話の中からも採集して加えたが、その際には対象を和語に限らず、漢語、形容動詞語幹なども含めた。

2. 2拍3類の音調をめぐって

伊吹島方言のアクセントについては、これまでもいくつかの報告と研究^{注3}がある。そのうち、妹尾修子(1966)は、中学生を対象として、1、2拍名詞と動詞、形容詞について報告したものであり、和田實(1966, 67)と山口幸洋(1969)は、主としてその論点が2拍名詞五つの類に対応する五つのアクセントの型が存在するという事実の確認にあったように見うけられる。さらに金田一春彦氏の言及も加え、これらを比較すると、4氏とも伊吹島アクセントにおいて2拍名詞が五つの型に言い分けられていることは認めておられる。しかし中学生を対象とした妹尾氏のものを除いても、なお具体的な音調の記述とその解釈については、若干のくい違いが見られる。とはいえそのくい違いは全体にわたるものではなく、第3類に関するものである。他の四つの類については、現代近畿方言の1/2, 3/4/5/の四つの型と極めて類似した音調であるという点で諸氏の一致を見、いうなれば近畿方言の四つの音調型に加わるもう一つの音調の聞き取りが各々異なっていると、その記述からは受け取れるのである。私の聞き取りとともに、3氏の記述(解釈)をまとめたのが表(1)である。これらから、伊吹島2拍3類の音調は次の点が微妙であり、解釈上問題になると考えられる。

① 始まりの高さは高か低か、あるいは中か。

② 微妙な下降は存在するのか。あるならばどこに位置するのか。

①については、私には山口氏が主張されるほど低くは聞かれず、心もち低いかとも感じられるが、高く始まるとしてよいように思う。②については、高から低への大きな下降は認

表(1) 伊吹島 2 拍名詞 3 類について

和田	$\overline{\overline{\circ\circ}} \quad \overline{\overline{\circ\circ}}\text{ガ}$	$\overline{\overline{\circ\circ}}\text{ガ}$ とも。2類と3類との音相は微妙に異なる。
山口	$\overline{\overline{\circ\circ}} \quad \overline{\overline{\circ\circ}}\text{ガ}$	低く平らに発音する。1類との区別がむづかしい。
金田一	$\bullet\bullet \quad \bullet\bullet$	個人により●●にも。
私見	$\overline{\overline{\circ\circ}} \quad \overline{\overline{\circ\circ}}\text{ガ}$	たとえば“ヤマ”“ヤマガ”なら、前者の“マ”と後者の“ガ”が同じ高さ。後者の“ヤマ”の部分は、単独の場合より平らになる。

められない。しかしながら、高の高さを保つのではなく、2拍目はやや下がり気味で、助詞「が」などが付いた場合にはその拍がやや下がると聞いた。つまり2類と3類とが紛れやすいとは聞かなかったが、ほぼ和田氏の聞き取りに一致している。一方、金田一氏の記述は、この微妙な下降を既存の調素のいずれかを用いて表そうとしたために、高低あるいは高下降調と聞き、またそのように記したものと思われる。

およそ、3類の音調が1類と2類との中間的な音調であることは疑いのないところであるが、その音調が微妙であるとか、記述が困難であるとか言われるのは、3類の音調自体のゆれなどに起因するというよりも、むしろ聞き手が、自らのアクセント、アクセント観で抱括しえないことによるのではないかと考えられる。こう考えるに至ったのは、自らの経験と反省に基づくところが大きい。私は、今では1類とも2類とも異なるゆるやかな下降調として3類を聞き分けているが、当初は1類との区別がつかなかった。その主たる原因は私自身のアクセントにあったと分析している。私の香川県大見方言では、およそ香川のアクセントがそうであるように、1類と3類とが合流して一つのアクセントの型をなしている。その音調は、助詞「も」、助動詞「や」が低くつく点では、伊吹島の1類に相当するが、それ以外については、伊吹島3類の音調に極似している(表(2)参照)。つまり、

表(2) 2拍名詞1類、3類の音調

伊吹1類	伊吹3類	大見1, 3類
$\overline{\text{トリ}}$	$\overline{\text{ヤマ}}$	$\overline{\text{トリ}}$ (ヤマも同じ)
$\overline{\text{トリガ}}$	$\overline{\text{ヤマガ}}$	$\overline{\text{トリガ}}$
$\overline{\text{トリノ}}$	$\overline{\text{ヤマノ}}$	$\overline{\text{トリノ}}$
$\overline{\text{トリモ}}$ (トリモ)	$\overline{\text{ヤマモ}}$	$\overline{\text{トリモ}}$
$\overline{\text{トリジャ}}$ (トリジャ)	$\overline{\text{ヤマジャ}}$ (ヤマジャ)	$\overline{\text{トリヤ}}$

高平調とこれまで記述され、私もそう認識していたはずのこの音調は、伊吹島1類のように下降しないものではなく、伊吹島3類同様やや下降していたのであった。つまり、大見方言などの1, 3類の合流は、単純に3類が1類に吸収された高平調であると言ってしまえないのかもしれない。逆に伊吹島に1類と3類との区別がなお存在するのは、伊吹島1類が頑固に高い平らを保っているからにはほかならない。高く始めて急激に下降する音調との弁別がなされればよい現在の近畿、香川などのアクセントでは、高平調と呼ばれる音調が、全く平らか、やや下がり気味かなど問題にする必要がない。しかし、伊吹島アクセントではその点を記述しないわけにはいかない。また、もし、2類と3類ではなく、1類と3類とが合流した香川アクセントと、伊吹島アクセントとを、アクセントの系譜の上で

殊に密接な関係にあると推定するならば、大見方言など香川県西部で確認される^{注9}高平調（と称されるもの）のゆるやかな下降も、単なる自然下降ではなく、非弁別の特徴として認めなければならぬ^{注10}。

さて、伊吹島アクセントの1類と3類との差異は、表(2)で見とれるように、助詞「も」「へ」、言い切りの助動詞「じゃ(じゃん)」の接続した文節からならば、だれでも容易に認知できる。しかし、助詞などの接続状況だけが、両者を区別すると判断するのはやや早計であろう。自分はゆるやかな下降が音韻的意味を持たない方言の話者であるという自覚のもとに耳を傾ければ、おのずと両者の音調差は聞こえてくる。

実は、この3類と同系列と認められるアクセントの型が3拍以上にも存在しており(後述)、所属語も多く、高平調とははっきり区別されているのである。それでは、両者を弁別するものの実体は何であり、いかなる方法をもって記述すべきなのだろうか。たとえば、2拍名詞とそれに1拍の助詞などが後接したのを見る限りでは、2拍3類の音調は、高中、高高中と表しうる。しかし、中を設けることで問題が解消される範囲は拍数の少ない場合に限られ、拍数が増加することによって中とも高とも言いがたい高さの拍が出現することが分かっている。つまり、2拍3類の系列は、三段観でも把えられない—と言うよりも、段階観で把えるべきものではないとするほかない。既存の調素でも、段階観によっても把え切れないアクセントの型が存在することから、近畿アクセントとはほぼ一致する他のアクセントの型についても、近畿アクセントについての解釈をそのままあてはめることが躊躇される。2拍3類の系列を含めた上での解釈と記述が求められねばならない。では、これに関わる弁別特徴を核によってならば表示できるだろうか。私は、アクセント素の考え方については、高や低の拍の寄り集まりとは考えないという点で、そういう拍を超えたアクセント観でなければ、伊吹島のアクセントは解釈できないであろうと思うものの、ここで従来行なわれている核によって、この1類と3類を記述し分けることは、少なくとも表層においては不可能ではないかと考える。なぜならば核表示もまた、確実に高い部分、あるいは確実に低い部分のいずれかの存在を前提としていると理解しているからである。

3. 3拍以上の名詞のアクセント

論を進める都合上、既に触れた所もあるが、改めて3拍以上の名詞(体言)についてその音調を概観したい。表(3)に3, 4, 5拍名詞の具体的音調を挙げる。ここでは、高起式をH, 低起式をL, 2拍3類と同系列と考えられるただらとした下降を有するものをH'とし、滝(急激な下降)の位置によって、abc……滝のないものをzで表し、それぞれの型の名称とした。あとの語彙表とあわせてご覧いただきたい。

まず、調査語数がなお不足しているためか、一部の型は所属語が極めて少ない。第一拍のみ高い型が5拍以上では稀であるというのはいたしかたない所かもしれないが、他にも頭から二つの拍が高いHb型などは、3拍でも4語、4・5拍では確例が見出せず、型の存否も含めてなお検討を要すると考えられる。^{注11}

2拍3類の系列であるH'系列に注目すれば、既に述べた通り、3, 4, 5拍とも、高平調(Hz型)とただらら下降するH'z型とが対立している。Hz型が高い平らを保つのに

表(3) 3,4,5 拍名詞の音調

3 Hz	サカナ	サカナガ	(4 Hz)	サカナモ	(4 Hc)	
3 Hb	ムスメ	ムスメガ	(4 Hb)	ムスメモ	(4 Hb)	
3 Ha	チカラ	チカラガ	(4 Ha)	チカラモ	(4 Ha)	
3 H'z	カタナ	カタナガ	(4 H'z)	カタナモ	(4 H'c)	
3 Lz	ウサギ	ウサギガ	(4 Lz)	ウサギモ	(4 Lc)	
3 Lb	イチゴ	イチゴガ	(4 Lb)	イチゴモ	(4 Lb)	
4 Hz	トモダチ		5 Hz	ウレノコリ	5 Lz	アリガタミ
4 Hc	ウメボシ		5 Hd	イシアタマ	5 Ld	アブラセミ
4 Hb	テオクレ		5 Hc	サライゲツ	5 Ld	ハゲアタマ
4 Ha	アサガオ		5 Hb	確例なし	5 Lc	オチボグチ
4 H'z	アサメシ		5 Ha	サドガシマ	5 Lb	ヒトニギリ
4 H'c	アマザケ		5 H'z	バチアタリ		
4 Lz	オミクジ		5 H'd	オヤゴコロ		
4 Lc	カマキリ		5 H'c	スリガラス		
4 Lb	イチジク					

表(4) H'z 型の音調

2 H'z	○○	○○ガ
3 H'z	○○○	○○○ガ
4 H'z	○○○○	○○○○ガ
5 H'z	○○○○○	○○○○○ガ

対し、H'z型の方は(表(4)で示したように)高さを保てず下降するが、最後の高さが低の高さまで下らないゆるやかな下降調である。つまり、拍数が増加するほど、よりゆるやかになるはずであるが、次第に高平調に紛れるということはない^{注12}。また私には頭から2拍ずつが組になってたらだらと下がっていくように聞かれるが、細かな段階の存在よりも下降全体に目を向けるべきだと考える。この下降については、高中低と際限なく下がっていくものではなく、またアクセント単位の最後が中で終わる文音調でもないことを確認しておかねばならない。

H'系列のうち、H'z型以外について見ると、H'b(2拍目がやや下がり、3拍目で大きく下降する)型の存在しないことが注目される。表2で既に挙げたように、2拍3類(2 H'z型)に「も」「じゃ」などが後接した場合、そのまま低く付けば3 H'b型となりそうだが、それを避けるように3 H'zあるいは3 Ha型をとるのが普通であるのは、このことと無関係ではあるまい。この事実は3 H'b型が存在しないことの傍証となろう。

一方、H'系列にも4拍以上には滝を有する型が存在している。4 H'c型アマザケ、5

H'c 型スリガラス, 5H'd 型オヤゴコロなどがそうである。これら, やや下降しさらに滝で大きく下降する型の存在は, H' 系列が非低起式であることを示している。しかしこれらは H'z 型に比べて所属する語の数も少なく, 被調査者ごとのゆれ (他の型で発音されること) もあり, H 系列に引きつけて解釈する余地も全くないとは言えない。

4 拍 5 拍の名詞 (体言) について, その大部分を占める複合語の前部成分が, 現在の伊吹島アクセントにおいて, H, H', L のいずれの系列に属するかを一覧できるようまとめたのがあとの語彙表Ⅱ, Ⅲである。これは, 現段階では H' 系列の特性を考える一つの方法として試験的に行なったもので, 複合の問題は, アクセントの歴史的変遷および複合の時期を考慮に入れて, これから取り組まねばならないと考えており, 今回の語彙表は目安として見ていただきたい。ただし, H' 系列が, L 系列あるいは H 系列のいずれかと, 特

表(5) 動詞の音調

ア	1-2 拍	I	<u>スル</u> (2 Hz)	<u>シタ</u> (2 Ha) 為
		II	<u>ミル</u> (2 Lz)	<u>ミタ</u> (2 Ha) 見
イ	2-2 拍	I	<u>シヌ</u> (2 Hz)	<u>シンダ</u> (3 Ha) 死
		II	<u>カク</u> (2 Lz)	<u>カイタ</u> (3 Lz) 書
		III	<u>オル</u> (2 Ha)	<u>オッタ</u> (3 Ha) 居
ウ	2-3 拍	I	<u>マケル</u> (3 Hz)	<u>マケタ</u> (3 Ha) 負
		II	<u>オキル</u> (3 Hz)	<u>オキタ</u> (3 Lb) 起
エ	3-3 拍	I	<u>サガス</u> (3 Hz)	<u>サガシタ</u> (4 Hb) 搜
		I	<u>ウタウ</u> (3 Hz)	<u>ウトータ</u> (4 Ha) 歌
		II	<u>ツクル</u> (3 Hz)	<u>ツクッタ</u> (4 Hz) 作
オ	3-4 拍	III	<u>マイル</u> (3 Lz)	<u>マイッタ</u> (4 Lb) 参
		I	<u>ワスレル</u> (4 Hz)	<u>ワスレタ</u> (4 Hb) 忘
		II	<u>ハナレル</u> (4 Hz')	<u>ハナレタ</u> (4 Hb) 離
カ	4-4 拍	III	<u>カカエル</u> (4 Lz)	<u>カカエタ</u> (4 Lb) 抱
		I?	<u>ハタラク</u> (4 Hz)	<u>ハタライタ</u> (5 Hc) 働
		II?	<u>ヨロコブ</u> (4 Hz')	<u>ヨロコシダ</u> (5 Hc) 喜
キ	4-5 拍	I?	<u>アキラメル</u> (5 Hz)	<u>アキラメタ</u> (5 Hc) 諦
		II?	<u>カンガエル</u> (5 Hz')	<u>カンガエタ</u> (5 Hc) 考
		III	<u>ツカマエル</u> (5 Lz)	<u>ツカマエタ</u> (5 Lc) 捕
補足	オ	3-4 拍	I	<u>ワスレ</u> (3 Hb)
			II	<u>ハナレ</u> (3 Ha)
			III	<u>カカエ</u> (3 Lb)

に混乱がはなはだしいとか、極めて深い行き来があるとかいう事実は認めがたく、およそ一つの系列として立てうるのではないかとする証しとなるように思う（これは、H、L 両系列がそれぞれ式を保っていることの裏返しでもある）。

6 拍以上についても、およそ 4、5 拍の延長で扱えられるものと考えてる。

4. 用言のアクセント

動詞、形容詞は音調にかなりの動揺が見られるが、現段階で音調型として認められたものを表 (5)、(6) に挙げた。なお形容動詞の語幹は体言として扱ったため、ここには含まれない。（動詞は、連用形終止形の拍数によって 3-4 拍などと示した。）

まず、表 (5) ア 1-2 拍動詞からオ 3-4 拍動詞までは金田一 (1974) 67 p ~ 72 p における類別にはほぼ一致する。ただウ 2-3 拍動詞、エ 3-3 拍動詞、オ 3-4 拍動詞それぞれの I (1 類) と II (2 類) とが終止形においても、下降しない H_z 型とやや下降する H'z 型とで区別されている点が注目に値しよう。この H_z 型、H'z 型による区別は 4 拍以上についても存在しているようであるが、断定は避けたい。

形容詞については、3 拍以上に 1 類 2 類の区別がなく、一つのアクセント型に合流している (表 (6) 参照)。二つの型が存在する地域が現在でもかなり見受けられるにもかかわらず

表 (6) 形容詞の音調

ア	2 拍	I	<u>スイ</u>	<u>スイカ</u> ッ <u>ッタ</u>	<u>スイナル</u>	酸
		II	<u>ナイ</u>	<u>ナカ</u> ッ <u>ッタ</u>	<u>ナシナル</u>	無
イ	3 拍	I	<u>アオイ</u>	<u>アオカ</u> ッ <u>ッタ</u>	<u>アオナル</u>	<u>アオイトリ</u> 青
			(<u>アオイ</u>)		(<u>アオナル</u>)	
ウ	4 拍	I	<u>ウレシ</u> —	<u>ウレシカ</u> ッ <u>ッタ</u>	<u>ウレシナル</u>	<u>ウレシ</u> — <u>シラセ</u> 嬉

らず、2 拍名詞について型の統合が行なわれていない伊吹島が、形容詞については統合が進んでいる点は興味深い。3 拍形容詞を例にとると、具体的な音調としては 3Ha 型、3Hb 型あるいは 3Lb 型も聞かれるが、それらは類を区別するものではなく、注 8 で述べた一連の滝の位置の後退現象によるものと思われる (3Ha 型と解釈しておく)。若い層ほど滝が 2 拍目の直後となる傾向が強いが、老年層でも語によっては両方聞かれることがある。

用言については、滝の後退現象が否かの見極めが困難で、なおアクセントの型としての解釈に至っていないというのが正直なところである。さらに調査を加えて確認し、追って報告したい。

5. 伊吹島方言のアクセント体系とその解釈

以上、なお不十分な点を含むが、これまで見てきた具体的な音調の型に基づき、5 拍を例にとって、伊吹島方言のアクセント体系を解釈してみたい。

ただら下降する H' 系列は、滝をも持ちうる非低起式であるが、これを高起式と扱えば次の 2 点が弁別の特徴として認められよう。

①高起式か低起式か

②滝の有無と滝の位置

しかし、これに加えてH系列を単なる高起式^{注15}である系列と弁別する要素を見つけなければならぬ。たとえば H' 系列のゆるやかな下降の行きつく所がおよそ中の高さであることから、

③滝の直前の拍、滝のないものは最末拍の高さが高か中か。

このような扱方で、これを弁別の特徴として加えれば、低起有標(①)、中を有標(③)として、表(7) A案が導かれる。さらに、次を低にする核(≡)のほかに、次を中にする核

表(7) 伊吹島のアクセント体系 I

	A 案	B 案	C 案
5 Hz	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 Hd	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 Hc	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 Hb	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 Ha	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 H'z	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 H'd	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 H'c	○○○○○	○○○○○	┌○○○○○
5 Lz	○○○○○	┌○○○○○	┌○○○○○
5 Ld	○○○○○	┌○○○○○	┌○○○○○
5 Lc	○○○○○	┌○○○○○	┌○○○○○
5 Lb	○○○○○	┌○○○○○	┌○○○○○

(≡)を設ければ、この二つの核を用いても解釈可能である(表(7) B案)。しかしこれらは、H'z型に従属的な助詞などが後接した場合、中の拍あるいは核(≡)の位置が移動してしまい、ちょうど低起式無核(ここでは Lz型)に昇り核を付すようなもので、充分な解釈とは言い難い。また、いずれかの拍あるいはモジュールが、ゆるやかな下降を担っているとするよりも、アクセント単位となる音連続全体にゆるやかな下降がかぶさっていると考えるべきであろう。そこで、H、H'、Lの3系列をそれぞれ示すことが最も適当な解釈ではないかと考え、それぞれの系列を示す符号を頭に付す記述法をとった(表(7) C案)^{注16}。H、H'のいずれか一方を無標^{注17}とすることも可能だが、私は、┌(高く始まって滝まで下降しない)、┐(高く始まってただらだら下降する)、└(低く始まる)の3系列を、それぞれが対立しあって存在するものと考え、全て表示するという立場をとりたい。

また、H'系列のただらだらとした下降については、2拍ずつが組をなすように下降していると述べたが、それは大見方言のいわゆる高平調も同じであり、2拍ごとに小さな滝が存在すると解釈する必要はなく、ゆるやかな下降が具体的にはそのように実現すると考えれば済む。複合語については語構成によって、あるいは微妙に実現のされ方が異なるかもし

れないが、それら一つ一つを記述する必要もないだろう。

さらに、トで表した H' 系列は、基底レベルにおいて“中の高さで始まるアクセントの型”と解釈することもできるかもしれない。その立場をとれば、符号もトでよい。つまり、中の高さであるものが、発せられる際に（表層において）始まりがやや高く実現し、滝の直前、あるいは最末部に至って、本来あるべき中の高さにたどりついたと、この下降を把えるのである。こう解釈すれば、和田氏、山口氏が述べておられるように、古代京都アクセントの低平調との関連が一層興味深いものとなる。

以上、C案によって1拍から4拍までの伊吹島方言のアクセント体系を示したのが表(8)である。

表(8) 伊吹島のアクセント体系Ⅱ (C案による)

			4 Hc [○○○○]
		3 Hb [○○○]	4 Hb [○○○○]
1 Ha [○]	2 Ha [○○]	3 Ha [○○○]	4 Ha [○○○○]
1 Hz [○]	2 Hz [○○]	3 Hz [○○○]	4 Hz [○○○○]
	2 H'z [○○]	3 H'z [○○○]	4 H'z [○○○○]
			4 H'c [○○○○]
1 Hz [○]	2 Lz [○○]	3 Lc [○○○]	4 Lz [○○○○]
	2 Lb [○○]	3 Lb [○○○]	4 Lb [○○○○]
			4 Lc [○○○○]

おわりに

“第一次アクセント”と称される伊吹島方言のアクセントは、実は従来の調素観、段階観そして核によっては解釈し切れないアクセント体系であった。2拍5類を五つに言い分けるという点をもって“第一次アクセント”の名称を与えることはいささかも誤ったものではなく、この類の統合の見地から全国の諸方言を見渡した徳川宗賢(1962, 1981)における氏の論は、多くの有益な事実と仮説を導き出しているし、異なったいくつかの第二次アクセントに囲まれたこの位置に第一次アクセントが発見されたことはこの理論の妥当性を証明しているといってもよい。しかし一方では、3拍についてはその対応が2拍ほどすんなりいかないことも事実である。3拍以上について、伊吹島方言と文献から導き出された過去の京都アクセント、また各地の方言との間の対応関係を明らかにすることが一つの課題となって残された。また、伊吹島アクセントを、類別の観点だけにとどまらず、その体系あるいは具体的音調までも古代のアクセントを今に伝えるものではないかとする考え方もなされているが、従来の方法で把え切れないアクセント体系であるという事実とその仮説とをどう結びつけてゆくかが大きな問題となろう。

伊吹島アクセントの古さは、ある観点からのある一面、一部分にとどまるのか、あるい

はいくつかの点にまで及ぶのか。また、部分的に古さが残るとは一体いかなることを意味するのか。そうした古代アクセントとの関連性、アクセントの変遷ということを中心にしながら、さらに検討していきたい。その際には、本論で引き合いに出した香川のアクセントについても合わせて考えたい。

語彙表 I (各々右の数字は類別を示す)

1 Hz	柄 ₁ 緒 ₁ 蚊 ₁ 気 ₁ 子 ₁ 巢 ₁ 背 ₁ 血 ₁ 戸 ₁ 帆 ₁ 身 ₁ 実 ₁	
1 Ha	毛 ₂ 名 ₂ 葉 ₂ 齒 ₂ 日 ₂ 藻 ₂ 矢 ₂ 世	
1 Lz	絵 ₃ 尾 ₃ 木 ₃ 粉 ₃ 字 ₃ 酢 ₃ 手 ₃ 荷 ₃ 根 ₃ 火 ₃ 屁 ₃ 穂 ₃ 目 ₃ 芽 ₃ 湯 ₃ 輪 ₃	
2 Hz	鮎 ₁ 粟 ₄ 牛 ₁ 梅 ₁ 顔 ₁ 風 ₁ 蟹 ₁ 金 ₁ 釜 ₁ 串 ₂ 口 ₁ 首 ₁ 鈴 ₁ 爪 ₁ 鳥 ₁ 虹 ₂ 庭 ₁ 箱 ₁ 鼻 ₁ 筆 ₁ 水 ₁ 道 ₁ 桃 ₁ 嫁 ₁ ……	80語
2 Ha	石 ₂ 上 _{クエ} 歌 ₂ 内 ₂ 音 ₂ 北 ₂ 紙 ₂ 神 ₃ 川 ₂ 癖 ₁ 籤 ₁ 寺 ₂ 夏 ₂ 橋 ₂ 人 ₂ 房 ₃ 冬 ₂ 真似 ₁ 胸 ₂ 村 ₂ 雪 ₂ 山羊 ₂ 技 ₂ ……	75語
2 H/z	足 ₃ 池 ₃ 犬 ₃ 色 ₃ 腕 ₃ 馬 ₃ 丘 ₁ 髪 ₃ 雉 ₁ 事 ₃ 里 ₁ 島 ₃ 月 ₃ 時 ₃ 年 ₃ 西 ₃ 花 ₃ 虫 ₁ 山 ₃ 物 ₃ 指 ₃ 脇 ₃ 綿 ₃ ……	140語
2 Lz	息 ₄ 板 ₄ 糸 ₄ 今 ₄ 海 ₄ 肩 ₄ 鎌 ₄ 絹 ₄ 汁 ₄ 筋 ₄ 銭 ₄ 外 ₄ 空 ₄ 足袋 ₅ 乳 ₄ 中 ₄ 何 ₄ 箸 ₄ 舟 ₄ 松 ₄ 味噌 ₄ 麦 ₄ 粟 ₄ ……	66語
2 Lb	青 ₅ 赤 ₅ 秋 ₅ 朝 ₅ 汗 ₅ 雨 ₅ 桶 ₅ 蔭 ₅ 角 _{カド} 亀 蜘蛛 ₅ 声 ₅ 鯉 ₅ 猿 ₅ 白 ₅ 隅 ₅ 鶴 ₅ 春 ₅ 鮎 ₅ 蛇 ₅ 前 ₅ 窓 ₅ 宿 ₄ ……	45語
3 Hz	霞 ₁ 田舎 ₁ 漆 ₁ 着物 ₁ 煙 ₁ 氷 ₁ 魚 ₁ 印 ₁ 机 ₁ 羊 ₁ 都 ₁ 毛抜 ₁ 黄金 ₃ 宝 ₄ 背中 ₆ 車 仕事 所 額 役場……	59語
3 Hb	従兄弟 東 ₄ 南 娘 ₂	4語
3 Ha	朝日 ₅ 鮎 ₅ 蝶 ₅ 簾 ₅ 錦 ₅ 山葵 ₅ 力 ₃ 二十歳 ₃ 岬 ₃ 鶉 ₄ 思 ₄ 剣 ₄ 形 ₁ 女 ₂ 伊吹 ガラス 花火 密柑 メロン……	39語
3 H/z	アタマ 頭 ₄ 扇 ₄ 男 ₄ 表 ₄ 鏡 _{カンナ} 敵 ₄ 刀 ₄ 鉄 ₄ 林 ₄ 光 ₄ 袋 ₄ 油 ₅ 五つ ₅ 命 ₅ 胡瓜 ₅ 心 ₅ 姿 ₅ 涙 ₅ 日照 ₁ 味方 ₁ 芒 ₆ 絵具 _{オナゴ} 女 ₄ 片手 形見 呉服 訛 彼岸 盲目……	63語
3 Lz	兎 ₆ 蛙 ₆ 烏 ₆ 狐 ₆ 虱 ₆ 雀 ₆ 高さ ₆ 田圃 ₆ 鼠 ₆ 雲雀 ₆ 間 ₂ 二つ ₂ 二人 ₂ 夕 ₂ 親子 ₅ 茄子 ₅ 境 ₄ 昔 ₁ 熬子 _{イリコ} 案山子 踵 炬燵 背広 太鼓 端 火傷……	52語
3 Lb	苺 ₇ 後 ₇ 蚕子 _{カイコ} 兜 ₇ 鯨 ₇ 葉 ₇ 卵 ₇ 便 ₇ 畑 ₇ 一つ ₇ 病 ₇ 小豆 蜥蜴 主 柱 榮螺 小麦 鶏肉 野原 秤 バナナ 平目 臍 百足 目玉 木綿 宿屋 我家……	44語

語彙表 II

(注) 前部成素を単独で用いた場合、どの系列に属するかによって、“H-” “H'” “L-” に分け、分析不可能なものや所属不明のものなどを“その他”とした。ただし、接頭辞“おー”は別立てとし、“かぎー” “ひとー”などは、“かぜ” “ひとつ”の属する系列に含めた。また、形容詞語幹(赤、白などは名詞扱い)はその形容詞の、動詞を出自とするものは、その動詞の連用形の音調によって分類した。(語彙表Ⅲも同様)

4 Hz	H-	顔色 風向 魚屋 夏草 鶏 水色 水草……	
	H'-	色紙 煙草屋 梅雨入 毒蛇 鉢巻	
	L-	赤紙 切傷	
	その他	蒲鉾 土 ザリガニ 三日月 約束	59語
4 Hc	H-	梅干 金持 嘴 口髭 唇 旅先 日当 昼飯……	
	H'-	垢抜 晩飯	
	L-	青海苔 跡取	27語
	その他	猪 産声 ^{オトイ} 一昨日 ^{オトシ} 一昨年 七夕 見世物……	
4 Hb	L-	手遅(Lb カ)	
	その他	御利益(H'z カ)	2語
4 Ha	H-	寝泊 世中	
	H'-	親指	
	L-	朝顔 鶴嘴 仲買	12語
	その他	小包 小荷物 椎茸 ^{グイスカ} 大好 犯人 満月	
4 H'z	H-	神棚 雷 渋柿 道草 若草 鱧皮 悪口	
	H'-	髪型 剃刀 雲行 鯛網 耳鳴 物差 指先……	
	L-	朝飯 雨靴 黒髪 白玉 手袋 針箱 股引……	59語
	その他	果物 計画 洪水 天才 鋸 弁当 夕方……	
4 Hc	H-	甘酒 石垣 入口 金槌 盃 齒磨	
	H'-	花婿	
	L-	汁掻 仲良	10語
	その他	上品	
4 Lz	H-	漬物	
	H'-	髪結	
	L-	絹糸 薬屋 空色 磨汁 針金 味噌汁 麦藁……	42語
	おー	御悔 御供 御茶漬 御彼岸 御光 御神籤……	
	その他	警察 小刀 ^{コガタナ} ジャガ芋 新築 父親 中日 薬局	
4 Lc	H'-	竹子 玉葱 蛤	
	L-	今先 肩凝 蟻螂 支那蕎麦 ^{ソトウモ} 外海 前垂……	14語
	おー	御絞 御守	
4 Lb	H-	伊勢海老 気違 歯車	
	L-	蛆虫 肩幅 空豆 中指 火加減 松虫 糞虫……	
	おー	御遍路 ^{オハジキ} 御弾	25語
	その他	イチジク ポタ餅 毎日 蛞蝓 紫(Hc カ) 来月……	

語彙表 III

5 Hz	H-	行止 売残 桜色 突当 ^{トツノツ} 寅年 怠者 丸潰……	
	L-	目玉焼 目鼻立	16語
	その他	肋骨 許婚 共稼	
5 Hd	H-	風車 金縛 口答 人見知 水加減 雪達磨……	
	H'-	厄払	25語
	その他	大晦日 薩摩芋	
5 Hc	H-	^{アガリダチ} 上口 植木鉢 鱧節 桜貝 水膨 (H'/z カ)	5語
5 Hb	H-	捻子回 (H'/c, H'/d カ)	1語
5 Ha	その他	佐渡島 (H'/c カ)	1語
5 H'z	H'-	命懸 裏表 裏返 男前 親譲 里帰 花盛……	
	L-	海坊主 住心地 鼠色 一人者 水車	21語
	その他	散髪屋 潮干狩 注連飾 福神	
5 H'd	H'-	油汗 (Ld カ) 親心 彼岸花 節回 骨休 山崩……	
	L-	雨蛙 雨宿 差向 台所 仲直 堀炬燵 (Ld' カ)	17語
	その他	唐辛子	
5 H'c	H'-	滑台 虫眼鏡	3語
	L-	擦ガラス	
5 Lz	H-	軽弾	
	L-	板挟 狐色 照返 浪花節 二階建 ^{フイトヨ} 二従兄弟	9語
	おー	御裾分 御年玉	
5 Ld	H-	当前 渡鳥	
	H'-	油蟬 油虫	
	L-	糸切歯 柏餅 甲虫 葉指 俄雨 端金 木綿糸……	14語
	おー	御人良	
5 Ld'	L-	粉葉 禿頭 針仕事 盆踊	
	その他	乳母車	5語
5 Lc	H-	当年 車海老	
	L-	後始末 入口	
	おー	おちょぼ口	7語
	その他	会社員 常備菜	
5 Lb	L-	一握 一眠	
	その他	好嫌	3語

(注) 5 Ld と 5 Ld' とは、ともに低起式で、滝の位置も同じであるが、語構成を見ると、5 Ld' が 2+3 であるのに対し、5 Ld は“糸切歯”を除いて 3+2 であり、相補的關係にあると認められる。

- 注 1 なお、久保ユキ氏、久保俣次郎氏については、自らの調査に加えて秋永一枝氏の調査テープ（1983年8月）も参考にさせていただいた。
- 注 2 金田一（1974）62 p~73 p。
- 注 3 妹尾修子（1966）、和田實（1966, 67）、山口幸洋（1969）
- 注 4 金田一（1974）38, 39 p。
- 注 5 金田一氏、山口氏に2拍3類の2拍目を拍内下降とする記述が見られる。実際第二拍に微妙な拍内下降が聞かれることがあり、一概に記述法の違いであるとかたづけられない。しかしこれはゆっくりした発音の時などに聞かれ、私は2拍目がややのびて3拍語の音調のように実現したものであると考えている。
- 注 6 殊に高平調に対する認識がこの聞き取りに影響しているように思う。和田氏は和田（1967）で、1類と3類ではなく、2類と3類との区別が微妙であると述べておられるが、近畿アクセントの高平調はかなり平らを保つからではあるまいか。同様に、高平調が高を保てない方言の話者には伊吹島1類が尻上がり感じられることも予想される。こうした聞き手のアクセントに基づいたいくつかの記述が、総体として記述困難との情報にもなりうる。とはいうものの、私自身自らのアクセントとの比較対照によって相対的にその音調を位置づけているにすぎないのかもしれない。
- 注 7 香川県三豊郡三野町大見。玉井節子（1965）では丸亀式に分類される15番の地点。金田一（1965, 66）ではDの高瀬タカノセに最も近い（高瀬アクセントとしてよいかとも思う）。私の母は伊吹島に生まれ、10歳で観音寺カンオンジへ移り、22歳で大見へ嫁いで30年。父は大見で生まれ育った。
- 注 8 表（2）の括弧内のように、滝あるいは山が後ろへずれる傾向が見られる。妹尾（1966）などに記されている若年層のアクセントはこれが徹底し固定化したものと思われる。（例）上が……●○●→●●○ 赤が……○●○→○●○^(○) この傾向は2拍名詞に限らず、かなり広く見られる。
- 注 9 観音寺市も同様であることを確認している。稲垣正幸（1981）に従えば高松方言は様相を異にしている。高平調等が下がり気味である地域がどの辺りまで広がっているのか調査していないが、方言研究会での発表に際しての質疑における上野善道氏の御助言によれば、愛媛県川之江市、香川県綾歌郡でも認められたという。燧灘を囲むように、東予地方から中讃地方にかけて広がっていることが予想される。
- 注 10 東京アクセントの平板式等の平らな部分も、拍数が増すとともにやや下降するが、これは自然下降として問題ないと考える。
- 注 11 若年層では、2H'z型が2Ha型へ、2Ha型が2Hb型へと移行しており、単純に滝の後退現象と片づけられないのかもしれない。Hb型をあき間とする意識の存在を立証することは不可能だろうか。
- 注 12 拍数が増すほど、始まりがわずかながら高くなっているのかもしれない。拍数が少ない場合には“中までしか下がらない”と説明することも可能だが、一步譲って“低まで下がりません”とした。いずれにせよ、東京アクセントの平板式の自然下降同様、物理的には拍数が増すにつれ、最末部の高さは低くなるにはちがいない。
- 注 13 たとえば、H'c型とHb型。注14参照。
- 注 14 4H'c型については、前部成素がH系列であるものが多く、H系列の4Hb型あたりと関係がありそうにも見える。4H'z型についても、前部成素にH'系列以外のものがかなり見られるが、それらの多くがH'系列の後部成素であり、あるいは後部

(44) 香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える

成素が全体の系列に影響したのであろうか。

- 注15 結論から言えば、伊吹島のH系列は高起式にはちがいないが、他地域の低起式か高起式かで区別される高起式とは質的に異なり、“単なる高起式”という説明は厳密には正しくない。
- 注16 示される内容は異っているが、外見は早田輝洋氏の語声調を導入した説一早田(1977)における平安期京畿方言のアクセント体系の名詞の基底形—に類似したものとなった。早田氏は当時「L, Vで表わされる三つの声調が存在したと推定しておられる。早田流に考えれば、伊吹島では低起式の声調の対立が消滅せずに残ったということになるのか。
- 注17 H'系列の方を大見方言などの高起式に引きつけて把えることも不可能ではない。つまり、だらだらとした下降調を無標とし、H系列の全く下降しない点を弁別の特徴として、H系列を有標扱いにするのである。H系列を無標とする解釈より優れていると思うが、そうしなければならぬ積極的理由は見出せない。
- 注18 現在の伊吹島アクセントのH/z型の音調をそのまま古代京都の低平調に結びつけるのは短絡的かと思われるが、完全に否定することもできないだろう。
- 注19 早い時期に枝分かれし、中央語とは別の変質を遂げたものとして位置づけるにとどまるのか。このあたりが今後の課題である。

引用文献

- 稲垣正幸(1979, 80) 「高松アクセントの音相」『国文学論考』15, 16 (修正版)
- 上野善道(1976) 「奈良田のアクセント素の所属語彙」『文経論叢』11—3
- 金田一春彦(1965・66) 「讃岐アクセント変異成立考」『国語研究』21, 22
(1974) 『国語アクセントの史的研究—原理と方法—』塙書房
- 妹尾修子(1966) 「香川県伊吹島のアクセント」『国語研究』22
- 玉井節子(1965) 「香川県のアクセント」『国語研究』20
- 徳川宗賢(1962) 「日本語諸方言アクセントの系譜試論—“類の統合と地理的分布”から見る」『国語国文学会誌』6
(1981) 『日本語の世界8 言葉・西と東』中央公論社
- 早田輝洋(1977) 「生成アクセント論」『岩波講座日本語5 音韻』
- 山口幸洋(1969) 「伊吹島方言の二拍名詞のアクセントについて」日本方言研究第12回発表原稿集
- 和田 實(1966) 「第一次アクセントの発見」『国語研究』22
(1967) 「2拍名詞5つの類を5つに言い分けるアクセント」日本言語学会第54回大会研究発表報告要旨

〔付記〕

本稿は、日本方言研究会第39回研究発表会(昭和59年10月19日、中京大学)での発表をもとに一部修正してまとめたものです。発表会場において御教示くださいました諸先生方に厚くお礼申し上げます。また、調査を快く受けてくださったインフォーマントの皆様、いろいろ御世話いただいた観音寺市役所伊吹支所の皆様、伊吹小学校の諸先生にこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

—早稲田大学院生—

(昭和59年11月19日 受理)